

# 児童養護施設職員のバーンアウトとその関連要因<sup>(1)</sup>

山地 明恵<sup>(2)</sup>・宮本 邦雄

## SUMMARY

The purpose of this study was to investigate factors influencing on the burning out of staffs working in residential care institutions. The interview investigation of preliminary study examined the stressors of the staffs and outlined the issues of these institutions. The questionnaire survey was carried out about institutional issues, children's behavioral problems, stress coping styles and attachment styles of staffs. The results showed that negative relations with the staffs and negative relations with the children had facilitative influences on burning out. In addition, anxious attachment style of the staffs had a facilitative influence. Further, it was suggested stress copings had complicated influence on burning out of the staffs.

**Key Words:** Residential Care Institutions for Children, Stress coping, Burning out, Attachment styles

児童養護施設とは、児童福祉法第41条において、「保護者のない児童、虐待されている児童、その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所したものに対する相談その他の自立のための援助を行う」施設として定められている。児童養護施設は、家庭による養育が困難になった、概ね2歳～18歳までの子どもたちが、児童相談所を通して入所し生活している。一人ひとりの発達段階の違いや生活体験の差があることを考慮し、集団の中で子どもたちの自主性を尊重しつつ、子どもたちの幸せと心豊かな成長を見守り、社会的な自立を支援している。その目的のために、保育士や児童指導員、心理担当職員等の子どもに関わる専門職員が配置されている。

児童養護施設に入所している子どもたちの多くは、保護が必要と判断された被虐待児であり、虐待によるダメージに起因する様々な症状や問題行動を生じている(森田, 2009)。虐待を受けた子どもたちは、愛着の問題、対人関係の問題、自己観の問題(自己調整能力、自己の連続性、自尊感情)、PTSDに関する問題、注意欠陥及び行動の問題がよくみられる(坪井, 2005)。

被虐待児には、虐待経験に起因する感情コントロールの困難さによる攻撃性や衝動性、愛情確認のための試し行動といった行動特徴があり、その養育を難しくさせている(坪井, 2005; 鎌田・駒米, 2008; 森田, 2009)。こうした子どもの養育にあたっては、その感情に共感し、受容する姿勢が有効だと考えられているが、被虐待児の抱えるトラウマとその辛さに日常的にかかわる事は職員が心理的に疲弊する危険性をはらんでいる(今・中野,

2010)。これらによって職員は、「二次的トラウマ」や「セカンダリー・トラウマティック・ストレス」を受けることによって「バーンアウト(燃え尽き)」してしまうことがある(Stamm, 1995; 神田・森本・稲田, 2009)。

バーンアウトは、ヒューマン・サービス従事者にとって不可避のストレス症状ともいわれており、心身の激しい消耗感を訴える、仕事への意欲や達成感が低下する、クライアントへの積極的なかわりを避けるなど、いわゆる“焼き切れてしまう”現象である(上野・山本, 1996)。その定義は、「長時間にわたり人を援助する過程で、心的エネルギーが過度に要求された結果、極度の心身の疲労と感情の枯渇を主とする症候群」(Maslach, 1976)とされる(久保, 2004; 荻野・瀧ヶ崎・稲本, 2004; 長谷部・中村, 2009)。対人援助職における感情労働がその主たる原因と考えられており、看護職や教師・保育者などを対象として研究がおこなわれてきた。

福祉現場でのバーンアウトの研究としては、古川(2010)が、介護老人保健施設職員のバーンアウトと職務満足度との関連について検討しており、「職業的地位」の高い人は、極度の疲労・消耗感、消極的なかわりが低く、個人的達成感の低下がみられた。また「業務」の多い人ほど身体的・情緒的・精神的疲労が高いという結果が得られている。

また、知的障害施設職員のバーンアウト関連要因の因果モデルを検証した研究(長谷部・中村, 2009)では、職員の日々の仕事上でのストレスの蓄積が精神的健康を悪化させ、それが持続することで「バーンアウト」に結びつくこと、障害児の療育について専門的なアドバイス

を与える「スーパービジョン」が「ストレスサー」を軽減させ、間接的に「精神的健康」を向上し「バーンアウト」を防止する可能性があることを示唆している。

一方、今・中野（2010）は、児童養護施設職員の共感疲労・共感満足とバーンアウトとの関係を検討し、バーンアウトの予防に寄与する要因を考察している。この研究では、共感疲労が児童から直接暴力を受けるだけでなく、児童の職員への攻撃を目撃するなど間接的な体験を通して生じることを示し、バーンアウトのリスク因子となること、一方で共感満足、特に仕事への満足がバーンアウトの抑制因子となる可能性が示された。また、共感疲労と共感満足はともに職員の経験年数によって異なる傾向が示され、若手職員においては、子どもとの間での共感満足を望む傾向にあり、その満足が得られにくいと感じることが共感疲労のみならず職員としての無力感へとつながっていた。

バーンアウトに関連する要因としては、大別すると環境要因（作業環境、管理体制、役割葛藤やソーシャルサポート等）と個人差要因（個人的属性、性格、価値観、コーピングパターン等）とに分けられ、これらの関連要因がバーンアウトをどの程度説明しているかについて多くの研究がなされている。

個人差要因の研究として、福島・名嘉・石津・興古田・高倉（2004）は、看護者のバーンアウトとパーソナリティ特性との関連を検討しており、バーンアウトの情緒的消耗感、神経症傾向と誠実性、脱人格化は調和性、神経症傾向と誠実性、達成感、外向性、誠実性と開放性との関連を報告した。そして個人的属性項目（性別、年齢、趣味の有無、相談者の有無）と比較して、パーソナリティ特性の重要性を指摘している。

また、看護学生と20歳代看護師を対象としてバーンアウトと看護師経験に焦点をあてた研究（和田・小林、2006）では、内的作業モデルとの関連が検討されており、バーンアウトと内的作業モデルに有意な相関が報告された。

愛着の内的作業モデルについては、Bowlby（1969）によれば、内的作業モデルが「人や世界との持続的な交渉を通して形成される世界、他者、自己、そして自分にとって重要な他者との関係性に関する表象」と定義される。愛着の内的作業モデルは、愛着人物以外の他者との関係性のスタイル特に他者のケアに結びつく養護性に影響を及ぼすとされ（久保田、1995）、子どもとの関係などの対人関係を通してバーンアウトに影響すると考えられる。

ストレス要因に対する個人差であるストレス・コーピ

ング方略も看護職においてバーンアウトに影響することが見出されており（佐藤・宮本、2005；齋藤・田中・村松・橘・宮岡、2009）、気晴らしや問題回避のコーピングが情緒的消耗感や脱人格化と結びつく傾向があること、積極的行動・認知コーピングは個人的達成感と関連することが示唆されている。

児童養護施設でのバーンアウトを扱った研究は数少なく、環境要因との関連を検討した研究はあるが、個人差要因を検討した研究は見当たらない。バーンアウトを抑制するものとして、個人のコーピングやソーシャルスキルも考えられる。本研究の目的は、児童養護施設における職員のバーンアウトに影響を及ぼす要因を検討し、職員のバーンアウトの予防について考察することである。バーンアウトを引き起こす要因として、児童養護施設のシステムの問題、児童養護施設の職員と児童の関係性の問題、児童の抱える問題、そして職員自身の個人差要因などが挙げられる。

## 目的

本研究は、児童養護施設職員の聞き取り調査に基づき、①職員の勤務体制の問題、②子どもとの関わりの問題、③職員の個人差の問題、④子どもの特徴の問題を取り上げ、児童養護施設の職場において職員が抱える負担やバーンアウトの要因になる可能性のある事項を尋ねる質問項目を作成する。

さらに質問紙調査を実施して、愛着スタイルとストレス・コーピングという個人差要因と環境要因を検討し、職員のバーンアウト関連要因の因果モデル（図1）を想定し、以下の仮説を検証するとともに、バーンアウトの予防策を考察する。

仮説1. 環境要因（施設の問題、子どもの特徴）が、コーピングを媒介して、バーンアウトに影響を及ぼす。

仮説2. 個人差要因（愛着スタイル、経験等）がコーピングを媒介して、バーンアウトに影響を及ぼす。

仮説3. 環境要因が直接バーンアウトに影響を及ぼす。

仮説4. 個人差要因が直接バーンアウトに影響を及ぼす。

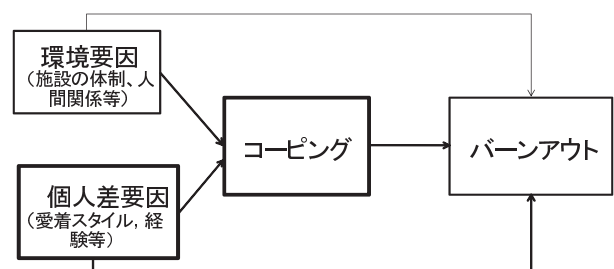


図1 バーンアウトに及ぼす因果モデル

## 方法

調査協力者：G 県と I 県の児童養護施設 13 施設に依頼し、回答に応じた 174 名（女性 114 名，男性 60 名），平均年齢 32.25 歳（SD = 11.39）を対象とした。

手続き：調査協力の了解が得られた施設及び職員へ，直接または郵送によって質問紙を配布した。後日，直接回収，もしくは郵送による返信を依頼した。調査は 2010 年 11 月～2011 年 1 月に行われた。

質問紙調査項目：

### ①児童養護施設職員のバーンアウト要因質問項目

予備調査として，児童養護施設 5 箇所の職員 6 名を対象として，養護施設や勤務，子どもの問題・特徴，子どもへの対応，愛着の形成，施設での工夫，地域との関連，自立への支援などについて，半構造化面接調査を行った。面接内容に基づいて KJ 法を行い，バーンアウトに及ぼす要因として，1) 子どもの問題・特徴，2) 職員の心理的なケア，3) 地域の中での職員の役割，4) 職員の特性，5) 職員の勤務体制・制度面での負担，6) 職場内での人間関係，7) 子どもとの関わり，8) 子どもの自立への問題の 8 カテゴリーに分類し，児童養護施設職員のバーンアウト要因質問項目とした。計 44 項目について，「あてはまらない（1 点）」～「あてはまる（5 点）」の 5 件法で回答を求めた。

### ②日本語版バーンアウト尺度

久保・田尾（1994）により作成されたバーンアウト尺度 17 項目を 5 件法で用いた。力を出し尽くし消耗してしまった状態である「情緒的消耗感」，サービスの受け手に対する無感情で非人間的な対応をする「脱人格

化」，ヒューマン・サービスの職務に関わる有能感や達成感である「個人的達成感」の 3 下位尺度から構成されている。

### ③一般他者版愛着スタイル尺度

中尾・加藤（2004）が一般他者用に修正した 36 項目を 7 件法で用いた。自分が他者から受け入れられるか否かのモデルである「見捨てられ不安」，自分が他者を受け入れるか否かのモデルである「親密性の回避」の 2 下位尺度で構成されている。

### ④職場用コーピング尺度

庄司・庄司（1992）が作成した 39 項目，4 件法で用いた。外的環境に働きかけてストレスを軽減させる行動的コーピングである「積極的行動・認知」，ストレスの受け止め方を変える認知的コーピングである「消極的行動・認知」，心身の不調感の改善・気晴らしのコーピングである「症状対処」3 下位尺度で構成されている。

倫理的な配慮として，得られた調査データは統計的に処理され個人は特定できないこと，学術的な目的以外で調査データを使用しないことを質問紙の冒頭で説明し，アンケート用紙の提出をもって同意を得たものとした。

## 結果

### 1. 各尺度の因子分析

まず，各尺度の質問項目に対する有効回答を得点化し，各尺度の因子分析を行った。

児童養護施設における施設の問題，子どもとの関わりの問題，職員との関係性の問題についての質問項目 29 項目について因子分析（主因子法，プロマックス回

表 1 児童養護施設問題尺度因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	F1	F2	F3	F4	共通性
6. イライラして子どもにあたることもある	.736	-.057	-.102	.072	.563
27. 子どもの要求に応じてあげられないことが多い	.572	.020	-.031	-.051	.345
25. 子どもとの相性が大切だと思う	.513	-.154	.289	.066	.276
8. 養育スキルが不足していると思う	.488	.147	.093	-.118	.302
24. 仕事をしていると心理的に不安定になることがある	.430	.170	-.159	-.016	.350
10. 職員同士の人間関係に問題がある	-.053	.933	.044	-.024	.809
22. 職員同士の人間関係でストレスを感じる	.088	.784	.020	.082	.678
18. 子どもになるべく笑顔で接するようにしている	.001	.059	.805	-.089	.613
17. 子どもとできるだけ個別の時間をとっている	-.006	.022	.462	.149	.247
14. 子どもには仕事と割り切って接している	.035	.074	-.072	.621	.397
20. 仕事とプライベートを分けている	-.087	-.020	.131	.566	.364
因子間相関	F1				
	F2	.429			
	F3	-.232	-.318		
	F4	.080	-.010	.116	



転)を行った。天井効果とフロア効果の見られる項目を除外し、固有値の減衰状態や項目内容の検討を行い、分析を繰り返した結果、4因子が抽出された(累積説明率44.94%)。各因子は、児童養護施設の職場において特異的な事柄に関する項目が含まれると解釈されたため、「児童養護施設問題尺度」と命名した。児童養護施設問題尺度の因子分析の結果を表1に示した。

第1因子は「イライラして子どもにあたることもある」「子どもの要求に応じてあげられないことが多い」など5項目で＜子どもとのネガティブ関係＞因子と命名した。第2因子は「職員同士の人間関係に問題がある」「職員間の人間関係でストレスを感じる」の2項目で、＜職員間のネガティブ関係＞因子と命名した。第3因子は「子どもとできるだけ個別の時間をとっている」「子どもになるべく笑顔で接するようにしている」の2項目で＜子どもへのポジティブ態度＞因子と命名した。第4因子は「子どもには仕事と割り切って接している」「仕事とプライベートを分けている」の2項目で、＜仕事としての割り切り＞因子と命名した。信頼性については、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、それぞれ0.670, 0.835, 0.533, 0.451であった。＜仕事としての関わり＞因子については、十分な整合性が確保できたとはいえないが、問題に留意しつつ分析を行うこととした。

さらに、児童養護施設の児童の特徴の問題についての質問16項目について因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、表2に示す2因子が抽出された(累積説明率42.39%)。この子どもの特徴尺度の第1因子は「よく言い争いをする」「試し行動が多い」など5項目で、CBCLの下位尺度の項目を参考に＜外向的問題行動＞因子と命名した。第2因子は「他の子から好かれていない」「他の子と仲良くできない」「悪いことをしても悪いと思わない」など7項目で、＜内向的問題行動＞因子と命名した。信頼性については、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、それぞれ、0.805,

0.824であり、十分な信頼性が確認された。

他の尺度についても同様に因子分析を行った結果、先行研究とほぼ一致した因子構造が得られた。すなわち、職場用コーピング尺度については、＜気晴らし＞因子( $\alpha=0.843$ )、＜積極的行動・認知＞因子( $\alpha=0.768$ )、＜自暴自棄＞因子( $\alpha=0.634$ )の3因子が認められた。バーンアウト尺度については、＜情緒的消耗感＞因子( $\alpha=0.806$ )、＜個人的達成感の低下＞因子( $\alpha=0.747$ )、＜脱人格化＞因子( $\alpha=0.729$ )が抽出された。最後に一般他者版愛着スタイル尺度においては、＜関係不安＞因子( $\alpha=0.944$ )、＜親密性回避＞因子( $\alpha=0.811$ )の2因子であった。

## 2. 各因子の記述統計と各因子間相関係数

児童養護施設問題尺度, 子どもの特徴尺度, 職場用コーピング尺度, 日本語版バーンアウト尺度, 一般他者版愛着スタイル尺度の因子得点の男女別因子得点の平均と標準偏差を表3, 表4に示した。

性差を検討するためt検定を行った結果、＜子どもとのネガティブな関係＞( $t=3.72$ )、＜職員間のネガティブな関係＞( $t=2.89$ )、＜外向＞( $t=2.44$ )、＜脱人格化＞( $t=2.54$ )、＜親密性回避＞( $t=2.50$ )に有意差が認められた。＜子どもとのネガティブ関係＞＜職員とのネガティブ関係＞＜外向的問題行動＞＜脱人格化＞＜親密性回避＞で、女性の方が高い得点を示し、＜親密性回避＞は男性の方が高い得点を示した。

次に、各因子間のスピアマンの積率相関係数を算出した。表5に男性における各因子平均得点間の相関係数を示した。環境因子群とコーピング＜積極的行動・認知＞の間、バーンアウトの＜情緒的消耗感＞、＜脱人格化＞の間に有意な相関が認められた。また、＜積極的行動・認知＞、＜自暴自棄＞と＜個人的達成感＞との間に有意な相関が得られた。愛着スタイルの＜関係不安＞も＜自暴自棄＞と＜個人的達成感＞との間に有意な相関を示した。

表2 子どもの特徴尺度因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

	F1	F2	共通性
4. よく言い争いをする	.824	-.118	.577
8. 試し行動が多い	.746	-.067	.502
3. 暴力をふるう	.647	.027	.440
7. 沢山の注目をひきたがる	.574	.168	.472
12. 誰かれかまわずついていく	.568	.025	.340
15. 他の子から好かれていない	-.202	.875	.598
13. 他の子と仲良くできない	-.003	.672	.449
14. 悪いことをしても悪いと思わない	.161	.527	.404
6. しゃべろうとしない	-.012	.507	.250
11. 学力が低い	.085	.479	.285
1. 嘘をついたりだましたりする	.291	.396	.378
5. 集中力や注意力が長続きしない	.326	.375	.391
因子間相関	F1		
	F2	.592	

表 3 各尺度の因子得点の平均と標準偏差（男性）

尺度名	因子名	人数	平均値	標準偏差
養護施設問題	子どもとのネガティブ関係	60	3.19	.703
	職員間のネガティブ関係	59	2.60	1.316
	子どもへのポジティブ態度	60	3.95	.790
	仕事としての割り切り	60	3.32	.965
子どもの特徴	外向的問題行動	58	3.12	.850
	内向的問題行動	58	3.23	.731
コーピング	気晴らし	58	2.70	.693
	積極的行動・認知	56	2.23	.445
	自暴自棄	60	3.59	.464
バーンアウト	情緒的消耗感	59	2.00	.724
	個人的達成感の低下	60	3.10	.798
	脱人格化	60	2.28	.885
愛着スタイル	関係性不安	57	2.81	.977
	親密性回避	59	4.26	.948

表 4 各尺度の因子得点の平均と標準偏差（女性）

尺度名	因子名	人数	平均値	標準偏差
養護施設問題	子どもとのネガティブ関係	112	3.61	.692
	職員間のネガティブ関係	114	3.17	1.167
	子どもへのポジティブ態度	112	4.01	.676
	仕事としての割り切り	113	3.13	.918
子どもの特徴	外向的問題行動	111	3.46	.889
	内向的問題行動	113	3.27	.688
コーピング	気晴らし	112	2.56	.588
	積極的行動・認知	109	2.28	.404
	自暴自棄	112	3.50	.436
バーンアウト	情緒的消耗感	109	2.10	.721
	個人的達成感の低下	112	3.16	.712
	脱人格化	113	2.66	.940
愛着スタイル	関係性不安	110	3.11	.959
	親密性回避	59	3.89	.896

表 6 に女性における各因子得点間の相関係数を示した。養護施設問題の各因子はコーピングの 3 因子との相関が顕著であり、バーンアウト 3 因子とも有意な相関が認められた。子どもの特徴 2 因子もバーンアウト

との関連を示した。コーピング 3 因子は特にバーンアウトの＜情緒的消耗感＞との相関が認められた。愛着スタイルは＜関係不安＞がコーピング因子とバーンアウトの＜情緒的消耗感＞、＜脱人格化＞と正の相関を示した。

表 5 各因子間相関（男性）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1.勤続年数														
[養護施設問題]														
2.子どもとのネガティブ関係	.16													
3.職員間のネガティブ関係	.10	.27 *												
4.子どもへのポジティブ態度	.23	-.04	-.22											
5.仕事としての割り切り	.01	.11	.13	.22										
[子どもの特徴]														
6.外向的問題行動	.12	.40 **	.39 **	-.07	.27 *									
7.内向	.03	.28	.35 **	-.01	.25	.61 **								
[コーピング]														
8. 気晴らし	.25	.16	.23	.29 *	.10	.02	.12							
9.積極的行動・認知	.00	.33 **	.32 *	-.28 *	.18	.37 **	.25	.24						
10.自暴自棄	.17	.14	-.02	.49 **	.14	.14	.38 **	.55 **	-.01					
[バーンアウト]														
11.情緒的消耗感	-.03	.34 **	.50 **	-.14	.22	.33 *	.26 *	-.14	.26	-.14				
12.個人的達成感の低下	-.01	.01	.00	-.29 *	.12	.11	.05	.09	.49 **	-.43 **	.03			
13.脱人格化	.03	.41 **	.42 **	-.23	.00	.26 *	.07	-.16	.09	-.01	.57 **	-.20		
[愛着スタイル]														
14.関係性不安	-.09	.56 **	.29 *	-.23	.11	.27 *	.07	-.05	.22	-.10	.40 **	-.07	.37 **	
15.親密性回避	-.21	-.16	.06	-.21	.09	.07	.06	-.10	.13	-.27	.06	.22	-.16	-.12

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

表 6 各因子間相関（女性）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1.勤続年数														
[養護施設問題]														
2.子どもとのネガティブ関係	-.08													
3.職員間のネガティブ関係	.10	.39 **												
4.子どもへのポジティブ態度	.20 *	-.23 *	-.11											
5.仕事としての割り切り	-.04	.02	.01	.08										
[子どもの特徴]														
6.外向的問題行動	-.06	.30 **	.12	.18	.11									
7.内向	.14	.27 **	.06	.18	.18	.53 **								
[コーピング]														
8. 気晴らし	.29 **	-.07	-.24 *	.10	-.14	-.09	.13							
9.積極的行動・認知	.08	.13	.22 *	-.21 *	.14	-.03	.08	.01						
10.自暴自棄	.07	-.24 *	-.23 *	.27 **	.05	-.05	.02	.38 **	-.15					
[バーンアウト]														
11.情緒的消耗感	.04	.45 **	.40 **	-.10	.16	.28 **	.33 **	-.21 *	.23 *	-.32 **				
12.個人的達成感の低下	-.35	.15	.08	-.13 *	.13	.03	.03	-.21 *	.16	-.05	.14			
13.脱人格化	.02	.46 **	.31 **	-.13	-.13	.23 *	.23 **	-.13	.12	-.18	.66 **	.06		
[愛着スタイル]														
14.関係性不安	-.01	.33 **	.24 *	-.11	.27 **	.05	.05	-.24 *	.29 **	-.24 *	.44 **	.05	.35 **	
15.親密性回避	-.15	-.11	-.14	-.12	-.12	-.12	-.12	.09	.07	.09	-.13	.31 **	-.21 *	-.14

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

### 3. バーンアウトに及ぼす関連要因の重回帰分析

仮説モデルに基づき、職場コーピング尺度の3因子〈気晴らし〉〈積極的行動・認知〉〈自暴自棄〉を従属変数、養護施設問題4因子、子どもの特徴2因子、愛着スタイル2因子を独立変数とする重回帰分析を行った。さらに、バーンアウト3因子を従属変数、その他の変数を独立変数とする重回帰分析を行った。男性の人数が少なかったため、男女こみの資料で分析を行った。表6に職場コーピングを従属変数とした結果を、表7にバーンアウトを従属変数とした結果を示した。

表7に示したように、職場コーピングの〈気晴らし〉因子を従属変数とした重回帰分析の結果、有意な効果

がみられたのは〈勤続年数〉のみであった ( $\beta = .278$ )。〈積極的行動・認知〉を従属変数とした場合は、〈子どもへのポジティブ態度〉 ( $\beta = -.220$ ) が有意に負の影響を示し、〈関係性不安〉に有意な正の影響がみられた ( $\beta = .183$ )。さらに〈自暴自棄〉については、〈子どもへのポジティブ態度〉が有意な正の影響を及ぼした ( $\beta = .317$ )。

次にバーンアウト3因子を従属変数とした重回帰分析の結果(表8)、3因子ともに有意な効果がみられ、〈情緒的消耗感〉を従属変数にした場合、〈職員とのネガティブ関係〉 ( $\beta = .256$ )、子どもの特徴の〈内向的問題行動〉 ( $\beta = .211$ )、職員の〈関係性不安〉 ( $\beta = .185$ )

表 7 職場コーピングを従属変数とした重回帰分析結果（標準偏回帰係数）

	気晴らし	積極的行動・認知	自暴自棄
	(N=153)	(N=151)	(N=155)
性別	-.044	.021	-.085
勤続年数	.278 **	.091	.017
[施設内人間関係]			
子どもとのネガティブ関係	.121	.020	.008
職員とのネガティブ関係	-.035	.161 †	-.062
子どもへのポジティブ態度	.098	-.220 **	.317 ***
仕事としての割り切り	-.007	.125	.055
[子どもの特徴]			
外向的問題行動	-.128	.024	-.028
内向的問題行動	.180 †	.062	.161 †
[愛着スタイル]			
関係性不安	-.141	.183 *	-.167 †
親密性回避	.060	.115	-.080
決定係数( $R^2$ )	.161	.201	.209
F値	2.728 **	3.530 ***	3.805 ***

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

に有意な正の影響がみられ、＜自暴自棄＞コーピングには負の影響がみられた ( $\beta = -.277$ )。＜個人的達成感の低下＞を従属変数にした場合は、愛着スタイルの＜親密性回避＞が正の影響 ( $\beta = .204$ )、コーピングの＜積極的行動・認知＞が正の影響 ( $\beta = .242$ ) を示し

た。＜脱人格化＞については、＜子どもとのネガティブな関係＞ ( $\beta = .257$ )、＜職員とのネガティブ関係＞ ( $\beta = .228$ ) が有意な正の影響を与えていた。図 2 に以上の重回帰分析の結果をパス図で示した。

表 8 パーンアウトを従属変数とした重回帰分析結果（標準偏回帰係数）

	情緒的消耗感 (N=146)	個人的達成感 の低下 (N=149)	脱人格化 (N=149)
性別	-.103	.098	-.015
勤続年数	.110	-.179 †	.078
[施設内人間関係]			
子どもとのネガティブ関係	.146 †	.134	.257 **
職員とのネガティブ関係	.256 **	-.036	.228 **
子どもへのポジティブ態度	.119	-.113	-.050
仕事としての割り切り	.110	.128	-.042
[子どもの特徴]			
外向的問題行動	.058	-.060	.061
内向的問題行動	.211 **	.018	.126 †
[愛着スタイル]			
関係性不安	.185 *	-.148 †	.119 †
親密性回避	.004	.204 **	-.111
[コーピング]			
気晴らし	-.066	-.013	-.065
積極的行動・認知	.083	.242 **	-.044
自暴自棄	-.277 **	-.128	-.099
決定係数( $R^2$ )	.468	.260	.362
F値	8.925 ***	3.653 ***	5.888 ***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

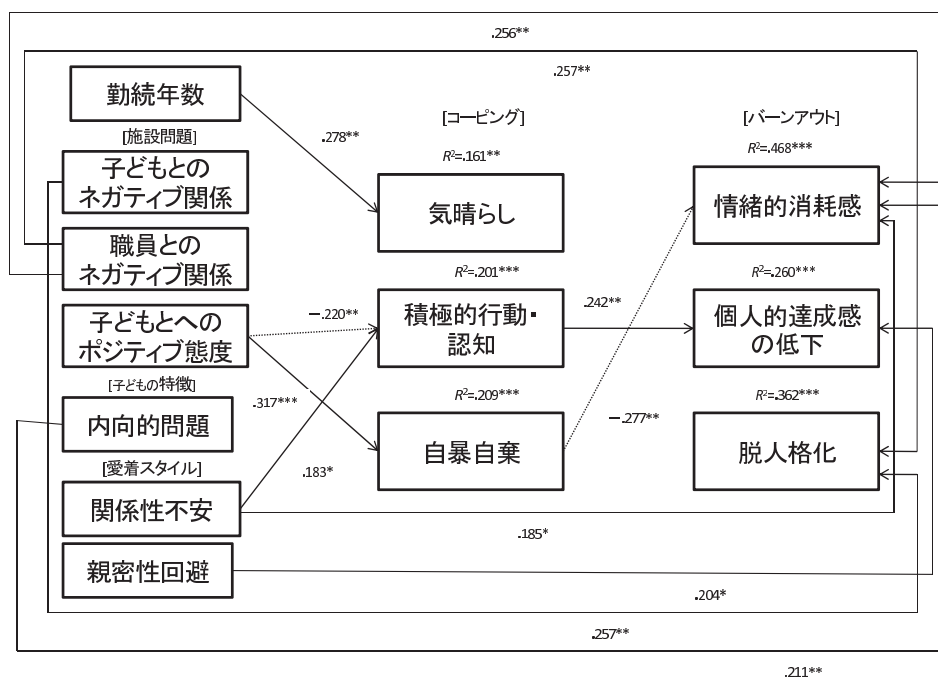


図 2 児童養護施設職員のバーンアウト関連要因

## 考察

本研究の目的は、児童養護施設の施設職員のバーンアウトに及ぼす施設の体制や人間関係などの環境要因、愛着スタイルやストレス・コーピングなどの個人差要因の影響を検討することであった。

コーピングの各因子に対しては＜勤続年数＞＜子どもへのポジティブ態度＞＜関係性不安＞が影響を及ぼしていることが示された。＜勤続年数＞は＜気晴らし＞コーピングに正の影響を及ぼしており、勤続年数が長い程、趣味やレジャーを楽しんだり、友人との時間を過ごしたり、気晴らしを行うことが多いと考えられる。しかし＜気晴らし＞がバーンアウトに影響を与えているとはいえなかった。

＜子どもへのポジティブ態度＞は、＜積極的行動・認知＞コーピングに負の影響を与えており、子どもへのポジティブな態度による問題を積極的に解決しようとする意欲の低下を示唆している。また子どもへのポジティブな態度が＜自暴自棄＞な行動を増大させることが認められた。これは、＜子どもへのポジティブな態度＞を意図的にとることがストレスラーとして作用することを示唆しており、問題を抱えた子ども達に対する業務以外の気苦労が推測される。また神田ら（2009）が報告したように、児童からの好反応に対して児童養護施設職員がもつネガティブな感情を反映しているとも考えられる。

また＜自暴自棄＞に対する正の影響は、職員が子どもに対して「笑顔で接するようにしている」「できるだけ個別の時間をとるようにしている」といった行動や姿勢が、逆にストレスとなって焦燥感が生じ、他者にあたるといった行動を生じさせている可能性も考えられる。

その他愛着の＜関係性不安＞が＜積極的行動・認知＞コーピングに正の影響を及ぼしており、個人の持つ人間関係に対する不安の高さは、積極的に問題を解決しようとする行動や考え方をもたらすといえよう。

さらに、バーンアウトに及ぼす影響を検討した結果、＜情緒的消耗感＞には＜職員とのネガティブ関係＞、＜内向的問題行動＞、＜関係性不安＞が促進的影響、＜自暴自棄＞が抑制的な影響を及ぼしていることが明らかになった。これは児童養護施設職員の共感疲労（今・中野, 2010）や対人援助職の感情労働（荻野ら, 2004）の側面が人間関係の問題から生じていることを示唆する。職員との関係の悪さや、子どもの内向的問題行動は児童養護施設職員にとって心理的疲労感や情緒的消耗感を増大させる要因であり、人間関係に対する不安の高さも消耗感を増す要因になっていると考えられる。一方、コーピ

ングの＜自暴自棄＞が負の影響を示していることから、自暴自棄的な行動ではあっても、情緒的消耗感を下げる効果があると思われる。

＜個人的達成感の低下＞には＜積極的行動・認知＞コーピングと＜親密性回避＞が正の影響を及ぼし、積極的に問題を解決しようとするほど、仕事への達成感が下がり、他者との親密な関係を避けようとすることで、周囲の人からのサポートも弱くなりポジティブな評価も減少して、達成感の低下につながると考えられる。特有の問題をもつ子どもへの対処能力を高めるために、研修やコンサルテーションが必要と考えられる（加藤, 2006）。

バーンアウトの＜脱人格化＞には、＜子どもとのネガティブ関係＞と＜職員とのネガティブ関係＞が有意な正の影響を及ぼしていた。どちらの因子もコーピングを媒介することなく直接バーンアウトに影響を与えており、児童養護施設職員にとって職員との関係の悪さや子どもとの関係の悪さは、「仕事に意味がない」「体も心も疲れ果てた」と感じるような、疲弊した状態をもたらす、人間的な交流が希薄化すると考えられた。

以上のことから、仮説1については、＜子どもへのポジティブ態度＞がコーピングである＜積極的行動・認知＞＜自暴自棄＞に影響し、さらに＜情緒的消耗感＞＜個人的達成感の低下＞に影響を及ぼしていたことから、一部支持されることになった。

仮説2については、＜勤続年数＞はコーピングの＜気晴らし＞に影響を及ぼしていたが、＜気晴らし＞からバーンアウト因子への有意な影響はみられず、コーピングの媒介する効果は認められなかった。＜関係性不安＞は＜積極的行動・認知＞を介して＜個人的達成感の低下＞に影響を及ぼし、一部支持されたといえよう。

仮説3については＜子どもとのネガティブ関係＞＜職員とのネガティブ関係＞がバーンアウトの＜情緒的消耗感＞＜脱人格化＞に直接影響を与えていることが認められたため、支持されたといえよう。また、仮説4については、個人差要因である愛着スタイル＜関係性不安＞＜親密性回避＞が、バーンアウトの＜情緒的消耗感＞＜個人的達成感の低下＞に直接影響を与えていることから、支持されたと考える。

最後に児童養護施設職員のバーンアウトの予防について考察したい。まず、環境要因として子どもと職員との人間関係が重要であり、職員間や子どもとの良好な関係がバーンアウトにつながるストレスは軽減されると思われる。また、子どもへの支援をチームとして行っていく上で、子どもたちの問題などの情報の共有が不可欠であり、チームワークを良くすることで、職員間の良好な関係を



もたらすことができると考えられる。さらに子どもの問題行動がバーンアウトを促進していたことから、施設児特有の問題を理解することが重要であり、アセスメントや対応方法を修得するための研修会への参加や、ケースカンファレンスでの意見交流も役立つであろう。

また、個人のもつ愛着スタイルがバーンアウトに影響を及ぼすことから、職員自身が自己の特性を把握することで、子どもとの関係性の中で起こる自己の感情や状態を理解でき、バーンアウトを予防する効果が期待できる(積・横山, 2003)。その他、職場内での人間関係の悩みを職場の仲間や上司、心理担当職員等に相談できる環境であるかどうかという事も、職員の精神的な負担を軽減する上で重要であり、バーンアウトの要因を減らしていく一つの環境整備であると考ええる。

## 注

- (1) 本研究は第一著者の平成22年度東海学院大学人間関係研究科修士論文に基づいている。なお、本研究の1部は第76回日本心理学会大会(専修大学)において発表された。
- (2) 現在、東海学院大学大学院研究生。

## 参考文献

- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss Vol.1: Attachment*. London: New York: Basic Books. 黒田実郎他(訳) 1976 母子関係の理論第1巻 愛着行動 岩崎学術出版社.
- 福島裕人・名嘉幸一・石津宏・興古田孝夫・高倉実 2004 看護者とのバーンアウトと5因子性格特徴との関連 パーソナリティ研究, 12, 106-115.
- 古川明美 2010 介護老人保健施設職員のバーンアウトと職務満足度との関連について 徳島文理大学研究紀要, 79, 1-8.
- 長谷部慶章・中村真理 2009 知的障害施設職員のバーンアウト関連要因の因果モデル 特殊教育学研究, 47, 147-153.
- 鎌田道彦・駒米勝利 2008 児童養護施設職員へのインタビュー調査からみた集団処遇に関する悩みについて 仁愛大学研究紀要, 7, 15-23.
- 神田有希恵・森本寛訓・稲田正文 2009 児童養護施設職員の施設内体験と感情状態—勤続年数の違いから— 川崎医療福祉学会誌, 19, 35-45.
- 加藤尚子 2006 虐待を受けた子どもの援助職への心理コンサルテーションの方法に関する研究—子どもとの援助関係の促進と職員のバーンアウト予防の観点から— 研究助成論文集 42, 136-145.
- 今百合・中野明徳 2010 児童養護施設職員の共感疲労に関する一考察 福島大学心理臨床研究, 5, 35-41.
- 久保真人 2004 バーンアウトの心理学 サイエンス社
- 久保真人・田尾雅夫 1994 看護婦におけるバーンアウト—ストレスとバーンアウトとの関係— 実験社会心理学研究, 34, 33-43.
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究 川島書店.
- 森田展彰 2009 児童福祉施設での治療的介入 発達, 30, 57-65.
- Maslach, C. 1976 Burn-out, *Human Behavior*, 5-9, 16-22.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27
- 荻野佳代子・瀧ヶ崎隆司・稲木康一郎 2004 対人援助職における感情労働がバーンアウトおよびストレスに与える影響 75, 371-377.
- 齋藤恵美・田中紀衣・村松公美子 2009 保育従事者のバーンアウトとストレス・コーピングについて 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 3, 23-29.
- 佐藤則子・宮本邦雄 2005 看護師のバーンアウト傾向とコーピングおよび相談ニーズとの関連, 東海女子大学紀要, 25, 109-120.
- 庄司正実・庄司一子 1992 職場用コーピング尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 産業医学, 34, 10-17.
- Stamm, B.H. 1996 *Secondary Traumatic Stress: Self-care Issues for Clinicians, Researchers, & Educators*. Baltimore, Sidran Press 小西聖子・金子ユリ子(訳) 2003 二次的外傷性ストレス ミネルヴァ書房
- 坪井裕子 2005 Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL) による被虐待児の行動と情緒の特徴 教育心理学研究, 53, 110-121.
- 積みどり・横山恭子 2003 児童養護施設に従事する援助者のバーンアウト予防の試み 上智大学心理学年報, 27, 87-94.
- 上野徳美・山本義史 1996 看護者のバーンアウトを予防するソーシャルサポートの効果—サポート・ネットワーク量・満足度・サポート源との関係を中心として— 健康心理学研究, 9, 9-20.
- 和田由紀子・小林祐子 2006 看護学生と20歳代看護師の対人関係の比較—ストレス反応・バーンアウトと看護師経験を中心にした一考察— 新潟青陵大学紀要, 6, 13-22.